

らびに彼女の活動と関係を絶った。)」(Bernoulli, C.A.: *Franz Overbeck und Friedrich Nietzsche—Eine Freundschaft, Zweiter Band*, Jena (Diederichs) 1908, S.436

- 36) Peters, Heinz Frederick: *Zarathustras Schwester. Fritz und Lieschen Nietzsche—ein deutsches Trauerspiel*, München (Kindler), 1983, S.208 f.
- 37) 11)の前掲書, S.29
- 38) 4)の前掲書, S.254 f.
- 39) 1)の前掲書, S.34
- 40) 15)の前掲書, S.278
- 41) A.エーラーによれば,「ケーゲル博士はもともと一匹狼で,一人で進める仕事を得意とし,また,誰よりも自分が優れているという自負心を持っていた。」(1)の前掲書, S.16)
- 42) 1)の前掲書, S.42
- 43) 1)の前掲書, S.40
- 44) 1)の前掲書, S.40
- 45) 1)の前掲書, S.42
- 46) 6)の前掲書, S.521
- 47) 1)の前掲書, S.46
- 48) 15)の前掲書, S.306
- 49) 1)の前掲書, S.231 f.
- 50) 6)の前掲書, S.491
- 51) 4)の前掲書, S.257
- 52) 18)の前掲書, S.258
- 53) 6)の前掲書, S.520
- 54) Podach, Erich F.: *Friedrich Nietzsches Werke des Zusammenbruchs*, Heidelberg (Wolfgang Rothe Verlag) 1961, S.400
- 55) 11)の前掲書, S.XII f.

- Bählaus Nachfolger) 1998, S.177 )
- 14) 4)の前掲書, S.252
  - 15) Steiner, Rudolf : *Briefe II 1890–1925*, Dornach (Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung) 1987, S.238
  - 16) 15)の前掲書, S.238
  - 17) エリーザベトとしては、一匹狼的なケーゲルの共編者としては、シュタイナーはあまりに我が強すぎると判断したようだ。
  - 18) Lindenberg, Christoph : *Rudolf Steiner — Eine Biographie, Bd.1*, Stuttgart (Verlag Freies Geistesleben) 1997, S.248
  - 19) Lindenberg, Christoph : *Rudolf Steiner — mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Reinbeck bei Hamburg (Rowohlt) 1992, S.57
  - 20) 4)の前掲書, S.257
  - 21) Steiner, Rudolf : *Friedrich Nietzsche — Ein Kämpfer gegen seine Zeit*, Dornach (Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung) 1963, S.9
  - 22) 4)の前掲書, S.256
  - 23) 21)の前掲書, S.76
  - 24) 21)の前掲書, S.63
  - 25) 4)の前掲書, S.256
  - 26) 21)の前掲書, S.92 f.
  - 27) Colli, Giorgio / Motinari, Mazzino (Hrsg.) : *Nietzsche Werke — Kritische Gesamtausgabe, Bd. III 1*, Berlin / New York (de Gruyter) 1972, S.291
  - 28) 21)の前掲書, S.10 f.
  - 29) 1)の前掲書, S.28
  - 30) 21)の前掲書, S.10
  - 31) B.マッキンタイヤーは、「エリーザベトの伝記こそが、ニーチェを人間的なあまりに人間的な人物ではなく、超人らしきものの権化に仕立て上げた」と述べている (Macintyre, B. : *Vergessenes Vaterland — Die Spuren der Elisabeth Nietzsche*, Leipzig (Reclam) 1994, S.205 )
  - 32) 1)の前掲書, S.27 f.
  - 33) 1)の前掲書, S.29
  - 34) Hoffmann, David Marc / Peter, Niklaus / Salfinger, Theo (Hrsg.) : *Franz Overbeck — Heinrich Köselitz [Peter Gast] Briefwechsel*, Berlin / New York (de Gruyter) 1998, S.384
  - 35) オーヴァーベックは、個人的な覚書に次のように記している。「フェルスター夫人が兄フリードリヒ・ニーチェの代理人、しかも精神的な代理人の役を引き受けたとき、彼女は横柄さという基本的な毀損の罪過を犯した。それがニーチェにとって危険であることを私はすぐに見てとった。(従って、私は直ちにフェルスター夫人な

たいと思う。

## 注

- 1) Hoffmann, David Marc (Hrsg.) : *Rudolf Steiner und Nietzsche-Archiv — Briefe und Dokumente 1894–1900*, Dornach (Rudolf Steiner Verlag) 1993, S.7
- 2) 1)の前掲書, S.26
- 3) 1)の前掲書, S.7
- 4) Steiner, Rudolf : *Mein Lebensgang*, Dornach (Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung) 1982, S.250
- 5) Hahn, Karl-Heinz : Das Nietzsche-Archiv. In : Behler, Ernst / Motinari, Mazzino / Müller-Lauter, Wolfgang / Wenzel, Heinz (Hrsg.) : *Nietzsche-Studien — Internationales Jahrbuch für die Nietzsche-Forschung, Bd.18*, Berlin / New York (de Gruyter) 1989, S.8
- 6) Steiner, Rudolf : *Gesammelte Aufsätze zur Kultur- und Zeitgeschichte 1887–1901*, Dornach (Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung) 1989, S.454
- 7) 6)の前掲書, S.454
- 8) 1)の前掲書, S.21
- 9) 6)の前掲書, S.468
- 10) コリン・ウィルソン (中村保男・中村正明訳) 『ルドルフ・シュタイナー』, 河出書房新社 1994, 134ページ
- 11) Hoffmann, David Marc : *Zur Geschichte des Nietzsche-Archivs — Chronik, Studien und Dokumente*, Berlin / New York (de Gruyter) 1991, S.12
- 12) それに先立つ1893年9月, P.ガストがニーチェ伝記を書こうとしているのを知ったエリーザベトは, 「兄の生涯は私が書きます。私ほどふさわしい者はほかにいません」と言って, ガストの伝記執筆を妨げている。
- 13) この資料館は, 1885年ゲーテの孫Walther Wolfgang von Goetheの遺言に基づき設置された。その遺言によって, ゲーテ自筆の遺稿・書簡の一切が, ザクセン・ワイマールのゾフィー大公妃の所有となった。1889年, Gleichen-Rußwurm家によってシラーの遺稿が譲渡されたのに伴い, 拡充されてゲーテ・シラー資料館となった。資料館の建物は, 1893年にゾフィー大公妃の提案により建設された (1896年竣工)。現在では, C.V.ヴィーラント, J.G.ヘルダー, E.メーリケ, F.ヘッベル, K.インマーマン, Ch.D.グラッペ, G.ビュヒナー, H.ハイネ, F.ニーチェ (第二次世界大戦後) など120人にのぼる文学者・思想家の文献資料が収集・保管されており, ドイツ最大の資料館となっている。(Günther, G. / Huschke, W. / Steiner, W. (Hrsg.) : *Weimar — Lexikon zur Stadtgeschichte*, Weimar (Verlag Hermann

かった。個人教授を通じて私が教えられたもうひとつの点は、エリーザベト・フェルスター・ニーチェ夫人には、繊細なことに対する感覚、それどころか大雑把な論理的批判の感覚が欠如しているということであった。彼女の思考には、これっぽちの論理的な首尾一貫性も認められず、公平さや客観性に対する感覚がことごとく欠落していた。』<sup>53)</sup>

シュタイナーのこの暴露文書は、「ニーチェの草稿がどのような人の手に委ねられているかを、世間の人々に明らかにしようとした最初の論文」(E.ポータハ)<sup>54)</sup>であったがゆえに、これが口火となって、その後上記の両者以外に、エリーザベト、G.ナウマン、P.モングレ、A.ザイドル、M.G.コンラート、C.G.ナウマンなどが賛否両論を主軸にしながら、半年近くのあいだに19篇にのぼる雑誌論文を発表した。シュタイナー自身もその後四たび、この泥試合的な様相を呈した論争に加わって、主にエリーザベトの非を責めた。(この論争の詳細については、別の機会に譲るしかない。)

最後にエリーザベトに関するD.M.ホフマンの総論的な指摘を引き合いに出して、ニーチェ資料館をめぐるこの第二論稿を締めくくりたい。

「ニーチェの妹エリーザベトは、資料館設立(1894年)後死去(1935年)するまでのあいだ、資料館の館主としてニーチェ受容に決定的な影響を及ぼした。彼女は、ニーチェ遺稿の管理者として、資料保管者として、また、ニーチェ全集の編者として、自分に度しがたいほど過大な要求を課した。彼女は場違いの地位に就いた場違いの女性であった。ニーチェの哲学に関してはまったくの素人であり、文献学のわきまえも皆無であった。彼女は、次第次第に外部の現実と自分の考えや空想や感情の弁別がつかなくなった嘘つき女に変身していった。ニーチェ評伝やニーチェ全集、ニーチェ書簡集における捏造、隠蔽、歪曲、伝説化などによって、英雄的なニーチェ像とニーチェの〈体系的な主著〉をでっち上げ、〈ワイマル伝承〉をつくりだしてしまった。それゆえに、フェルスター・ニーチェ夫人は繰り返し批判にさらされ、特に現代に至ってからは、歪曲化されたニーチェ受容については、ひとりで贖罪山羊の烙印を背負わされている。』<sup>55)</sup>

エリーザベトは、シュタイナーとの関係を絶ったのち、つねに自分の周辺に次々と強力な支援者を得て、ますます「ニーチェ運動」(Nietzsche-Bewegung)の活動の輪を広げ、ニーチェ資料館を言わばメッカとして、ニーチェ哲学を次第にドイツ民族主義やナチズムなどの政治的潮流と結びつける裏方の役を果たしていく。次稿においては、それらの点に関する考察を試み

う趣旨の見解を示している<sup>50)</sup>。シュタイナーは、自分が他人からは〈ニーチェ主義者〉と見られていたことに対して、「私は、まるでニーチェを通して霊魂 (Geist) というものが啓示されたかのように、ニーチェに金縛りにあったのだ」<sup>51)</sup>、とも述べている。いずれにせよ、シュタイナーのニーチェ言及の多くが、遺憾ながら評論的・随想的な次元に留まっていることは、否めない事実である。シュタイナーにとってニーチェという存在は、厳密な解釈の対象であったというよりむしろ、「避けて通ることのできない19世紀末の魅力的な精神」(シュタイナーの言葉)として、自らの問題意識に資する豊富で自在な糧であっただろう。それゆえに、シュタイナーはニーチェの思想そのものに対する評価さえ、自在に変化させ、そうすることによって自分にとっての本質的な課題に演繹する自らの「自由な精神」を確保した。少なくとも、エリーザベト離反後のシュタイナーについて言えば、それまでの「あまりにもポジティブな見方を乗り越え始めて、もはや〈われわれの時代のもっとも偉大な精神〉の名望を是が非でも守ろうとする義務を感じなくなり」<sup>52)</sup>、より自由な観点に立つようになったことは、顕著な傾向と言えるであろう。

ケーゲル解任後1年余りの1898年10月に、A.ザイデルが新しい編纂者として迎えられ、その後を次ぐかたちで1899年8月に、E.ホルネッファーが任命された。遺稿4巻を含む全12巻の従来のケーゲル版全集は「利用に耐えられない」とされて、その一部は回収され廃版にされたが、さてその根拠を示すべく、エリーザベトの意に沿うかたちでE.ホルネッファーが小冊子『ニーチェの永遠回帰説と従来のその刊行書』(1899年12月)を公にした。しかしこの著述がケーゲルに対する極めて荒っぽい個人攻撃であり、あまりにも事実を歪曲していたため、資料館の事情に詳しく、ケーゲルの仕事を高く評価していたシュタイナーは、資料館ならびにエリーザベトがめぐるした策謀を批判する暴露的な論文を発表する。1900年2月10日発行の『文学マガジン』誌上に発表した「ニーチェ資料館と従来の編者に対する資料館の非難——暴露文書」(Das Nietzsche-Archiv und seine Anklagen gegen den bisherigen Herausgeber——Eine Enthüllung)と題するこの論文は、その前段においては、非難されたケーゲルに対する弁護論が展開され、後段においては、エリーザベトの性格や資料館の内部事情が暴露的に記述されている。

「フェルスター・ニーチェ夫人に対する(ニーチェについての)個人教授を通じて私が知ったまず第一のことは、彼女が兄フリードリヒの教説の一切に関してずぶの素人であるということである。ニーチェの教説のもっとも単純な事柄についてさえ、自分なりの考えを何ひとつ持っていな

を懇請している。しかし、ケーゲルはその後デュッセルドルフの化学工場の取締役役に就いており、「もはや再びニーチェ資料館のゴタゴタに巻き込まれる気持などさらさらなく」、一方シュタイナーも『文学マガジン』の編集に全力投球をしていて、エリーザベトとの二度にわたる交渉（1898年3月および7月）には応じたものの、結局のところ話合いは不成立のままに終わった。

序いでながら記せば、エリーザベトはこの間、J.ホーフミラー、A.リール、M.ハインツェ、L.ベルク、G.ジンメル、R.M.マイヤーなどとも、ニーチェ全集編纂のための交渉を持ったが、いずれも断られて、結局、翌1898年の秋に、ようやくA.ザイデルを編者として迎えることができた。そして、従来のケーゲル版に替えて、いわゆるグロスオクターヴ版、クラインオクターヴ版の編纂に取りかかることになる。

## 5 結 び

こうして、シュタイナーは4年余り続いたエリーザベトとの関係を断絶する決心をし、エリーザベトに宛てて、最後の書簡（1898年8月23日付）を送った。

「信じていただけますか。わが天職だと思った任務の遂行が許されないことは、わたしの生涯でこのうえなく気の重いことです。しかしながら、今回の私の場合のように、このような誤解を受けることになれば、誰にも諦めのつくことかもしれません。（中略）私の勘違いのために、私は今ひどい目に会っているのです。しょせん、これも私の運命なのでしょう。私はそれに対してなすべき術もありません。（中略）敬愛するフェルスター・ニーチェ夫人！どのような事態になろうとも、これからも私はつねにニーチェの擁護者であり続けるでしょう。」<sup>49)</sup>

シュタイナーは、ニーチェ資料館とのあらゆるコンタクトを絶ち、エリーザベトとのあいだの人間関係を絶った。しかし、そのことは決してニーチェの思想との係わり合いの断絶を意味しない。シュタイナーは、その後も引き続き、評論や講演などを通じニーチェに言及した。むろん、シュタイナーのニーチェ観には、独創的な解釈や体系的な論理が見られるわけではない。シュタイナーのニーチェ評価には、その時々によってかなりの振幅が認められる。ニーチェを高く評価する言辞が見られる一方で、たとえば1900年8月のニーチェ追悼文においてシュタイナーは、ニーチェは現代における現実生活や時代の深刻な窮状とはまったく無関係の存在であった、それゆえにニーチェをわれわれの時代を代表する精神の持主とするわけにはいかない、とい

かぎり、この資料館騒動は、フェルスター夫人の化けの皮を完膚なきまでにひっぱがして終焉を迎えました。」<sup>47)</sup>さらにこれに付け加えて、「これは紛れもなく裁判沙汰です。フェルスター夫人が奸策を弄してSt.氏を名誉失墜の状況に陥れたということは、(中略)明白に立証されたことであり、否定すべくもない事実です」と述べている。一方、シュタイナー自身は、この件についてA.オイニーケ宛書簡(同年12月10日付)に次のように書き送った。「フェルスター夫人の行状は前代未聞というほかありません。彼女は他人を思うままに弄ぼうとしています。(中略)すべての事態は、はなはだ険悪な紛糾の方向へ向かって展開しています。どのような結末になるのか、予想だにつきません。」<sup>48)</sup>

エリーザベトは、ケーゲルとシュタイナーなどに私信を綴って、長々と抗弁をしているが、客観的に言って、いずれも的はずれの「恥知らずな」(シュタイナーの言葉)弁明に終始している。すなわち、「シュタイナーは気持ちが動転していたので、自分が就任の同意をしたことを忘れてしまったのだ」とか、「ケーゲルとシュタイナーとの決闘を回避するために、自分が一切の罪を引き受けた」などと、明らかなこじつけの理屈を並べてひたすら言い逃れをしている。

Ch.リンデンベルクは、このケーゲルとシュタイナーとエリーザベト三者間の人間模様を「ドラマチックな対決」(die dramatische Auseinandersetzung)と呼んだが、その原因はしよせんエリーザベトの「お話にもならないような」策略と嘘言に発するものであった。シュタイナーは、「巧みに言葉をひねり出す術に長けた」エリーザベトについて、「この夫人のこじつけだらけの態度の一切合財」は全然信用できない代物だった、と述べている(シュタイナーの1896年12月19日付、オイニーケ宛書簡)。

ケーゲルは1897年7月、ニーチェ資料館を解雇され、シュタイナーもエリーザベトに愛想をつかすかのように同年7月、伝統を誇る文芸週刊雑誌『文学マガジン』の編集長の座におさまった。(実は、シュタイナーの就任交渉中に、エリーザベトはこの有名な雑誌の利権を買い取ってニーチェプロパガンダの機関誌にしようと、乗っ取り計画を凶った。当時、急速に広がりを見せ始めていたニーチェ反響の波を鋭敏に感じとったエリーザベトは、自分が保管している未公開のニーチェ遺稿を、この雑誌に小出しに掲載することによって「実入りのよい商売」をもくろんだ、といわれる。ところが、この動きを知ったケーゲルが逸早くシュタイナーに通報し、シュタイナーは水際でこれを阻止した。)

はなはだ奇妙なことに、エリーザベトはケーゲルおよびシュタイナーとの関係が決定的な段階にいたった後も、二人に対してニーチェ全集の編纂作業

期間にわたって務めるつもりはなく、どこかの大学の講師職を見つけるまでの「一時的な任務」と考えていたようである。

ところが、シュタイナーのそのような思惑に水を差すような一連の「お話しにもならないような小事件」(heiteres Intermezzo)がその後相次いで起こり、ニーチェ資料館におけるエリーザベト、ケーゲル、シュタイナーの人間模様は、いわゆる〈1896年暮の危機〉へ向かって、急速に集約されることになる。

エリーザベトは、この年の暮ケーゲルが出した新聞の結婚広告に、ニーチェ資料館編集員の肩書が入っていなかったことに、ひどく立腹した。エリーザベトは、「ニーチェ資料館のことがまったく黙殺された」(エリーザベトのナウマン宛1896年12月9日付書簡より)ことに、顕な不快感を示し、「ニーチェ伝承(Nietzsche-Tradition)のためにケーゲル博士が献身的に働いてくれると思ったのは、完全に私の思い違いでした」(同上)と、憤っている。エリーザベトは、編集員ケーゲルに引導をわたそうとして、さらに次のような手の込んだ策謀をめぐらせた。

ケーゲルとエミリー・ゲルツァーとの婚約を祝うパーティーが、同年12月16日の日曜日、ニーチェ資料館で催された。ところが、その前日にエリーザベトはシュタイナーと二人だけの密談の場を設けた。すなわち、シュタイナーが正式にニーチェ資料館編集員に就任して欲しい旨の要請をするためであった。シュタイナーはしかし、エリーザベトの要請に対して、こう答えたという。「あなたのおっしゃることは、まったく無理な話です。なにしろ、ケーゲル博士がニーチェ全集編者であることは、契約に基づいて決まっていることです。私自身にも編者になる気があると言ったところで、まずケーゲル博士との話し合いが行われなにかぎり、意味のないことでしょう。」<sup>46)</sup>この頃になってケーゲルは、病的なほど興奮状態に追い込まれていた、と言われる。

シュタイナーは、この密談のことは他人に決して口外しないで欲しい旨をエリーザベトに頼み込み、彼女もそのことをシュタイナーにしかと約束した。

ところが、エリーザベトはその口約束をいとも簡単に破ったばかりではなく、数人の者(ナウマン及びケーゲルの妹)に対して、「シュタイナーが共同編纂に同意した」と、まったく出鱈目な嘘言を吐いた。それを聞きつけたケーゲルは、それが嘘言とはつゆ知らずシュタイナーを裏切者と思い込んで、重大な決意のもとに(決闘をも辞さない覚悟で)シュタイナーに釈明を求めた。数日後、立会人同席のもとに両人は話し合いを持ったが、互いに事実関係を確認して、再び和解に至った。ケーゲルはナウマン宛書簡に次のように書いている。「St.氏の正当性は完全に証明されました。個人的な問題に関する



だ気掛りでなりません。』<sup>40)</sup>

1896年8月に、エリーザベトはナウムブルクのニーチェ資料館を、「古典作家たちの後光の栄にあずかるべく」(um vom Nimbus der Klassiker zu profitieren)、華やかな文化都市ワイマールへ移転させた。さて、その移転を伝える報道記事のなかに、シュタイナーがニーチェ全集の共編者である旨の、明らかな誤報が含まれていた。ケーゲルという人物はもともと一匹狼的な性格で<sup>41)</sup>、単独のニーチェ編者ということに誇りを感じていたので、寝耳に水のこの報道に驚愕すると同時に、大いに憤慨した。この誤報を意図的に工作した張本人がエリーザベト以外にありえないことを、ケーゲルもシュタイナーもすぐに察知したと考えられる。シュタイナーは早速、新聞社宛に誤報訂正の要請をした。(そして現に、シュタイナーの要請文がそのままの形で新聞に掲載された。その掲載文については、紙幅の関係で割愛せざるをえない。)

エリーザベトが試みた策謀の目的は、ケーゲルとシュタイナーを反目させることによって、「自分が漁夫の利を得ようとしたため」(ケーゲルのホーフミラー宛書簡より)であったと思われる。気心の通じ合っていたケーゲルとシュタイナーの間柄を分断し、かつ、ケーゲルの自尊心をくじくことによって、ケーゲルを辞任に追い込み、代ってシュタイナーの任用を図ろうとした形跡が見てとれる。エリーザベトとしては、ニーチェの遺稿『あらゆる価値の転換』の出版を急ぎたい事情に迫られていたが、ケーゲルのマイペースの仕事ぶりには不安を抱いており、「より優秀な編者」をこれに充てようという心づもりであった。ニーチェ全集の発行者であるナウマン宛の書簡に、エリーザベトは次のように書いている。「私は、『あらゆる価値の転換』の出版のために、別のもっと優秀な編者を見つけています」(同年12月3日付)、と。<sup>42)</sup>

そう言えば、エリーザベトはニーチェ哲学についての個人教授(週2回、各2時間)を、編集員のケーゲルに対してではなく、館員でもないシュタイナーに依頼した。すでにニーチェ編者として名をなしていたケーゲルにとっては、このことじたい大きな屈辱であったに違いない。D.M.ホフマンによれば、それは、「ニーチェ専門家として自分が秀抜であると感じていたであろうフリッツ・ケーゲルを、手ひどく侮辱するものであった。」<sup>43)</sup>あれこれの原因が重なって、「1896年秋以降、フェルスター夫人とフリッツ・ケーゲルのあいだの関係は、みるみるうちに悪化の方向をたどっていった。」<sup>44)</sup>

一方、シュタイナー自身は、ニーチェ資料館での編集の仕事に内心大きな魅力を感じていた。6年間務めたゲーテ・シラー資料館の職も、この1896年の夏には自ら辞任している。実のところ、「ケーゲル解任の場合に備えて、その任務に就く心の準備をしていた」<sup>45)</sup>と言われるが、シュタイナーとしては、長

るこの世間から隔絶された偉大な人物の感覚が、ほうふつと呼び覚まされた。母親のフランツィスカが、愛するわが子に話しかけるような調子で話しかけた。情愛のこもった言葉であった。〈お前は本当に良い子だね。〉母親が毛布に触れると、ニーチェはかすかに動物がほえるような声を発した。たびたび上の方を見上げたが、眼差しはたえず右の方へ向けられたままだった。まったく安らいだ様子で、頭を長いすのひじ掛けに横たえていた。母親が手前のテーブルをずらして、胸の上に組まれたニーチェの両手をそっと握った。〈息子は疲れていますわ〉、と母親は言った。〈午前中はほとんど眠ってばかりなんです。〉確かに、ニーチェには安静が必要だ。手に触れたりすると、〈僕を静かにしておいてくれ〉とでも言うように、咆哮するような声を発する。母親は再びテーブルを長いすのそばに戻した。私はニーチェの視線をまともにのぞき込めなかったが、そこに寝ているニーチェの姿を眺めていると、私はどう見ても、このニーチェが病臥の人とは思えなかった。』（シュタイナーの遺した備忘録より）<sup>39)</sup>

エリーザベトは、病床にある痴呆状態のニーチェとの面会を許すほどに（母親フランツィスカは、発狂したわが息子を人目にさらすことを極度に嫌がっていたにもかかわらず）、シュタイナーに対して絶大な信頼感を寄せていたが、かたやシュタイナーは、ニーチェの蔵書目録作成のためふだんより長逗留したこの期間に、皮肉にもエリーザベトという人物の性格や行状や、おそらくはさまざまな風評などについても、つぶさに見聞する結果となったようだ。両者のあいだの人間関係を微細に検証するかぎり、おそらくはこの時点の前後を境にして、以後シュタイナーは少しずつエリーザベトに対する自らの距離感を認識していくと考えられる。多少先取りして言うならば、――気分が変わり易く定見がないエリーザベト、ニーチェの思想のことはほとんど素人同然で、資料館運営についても強引で陰謀的な振舞いをみせるエリーザベト。どうやら、シュタイナーの胸の中には、次第にそのようなエリーザベト像が形成されていく。

シュタイナーは、上述の目録作成に携わっていたとき、アンナ・オイニーケ夫人（それから3年後にシュタイナーは彼女と結婚した）に宛てて、見落とすことのできない次のような私信（1896年1月20日付であろうとされる書簡）を書き送っている。「この資料館は、ひとそれぞれの言葉をみじめにする不安定な状況にさらされているように感じられます。これから先の一切の事態が、現代のもっとも偉大な思想家の遺稿が保管されているこの資料館ならびにその周辺を舞台として繰り広げられることになるとすると、私ははなは

トとの係わり合いがもっとも深い一年となった。しかし同時に、シュタイナーがしだいにエリーザベトの性格や行状に対して疑惑を抱き始め、ニーチェ資料館における「1896年暮れの危機」(die Krise Ende 1896)に巻き込まれていく一年でもあった。

先述したように、唯一の編集員ケーゲルの不在(約半年間イタリア滞在)のため、エリーザベトはニーチェが所蔵していた書籍や小冊子など1077冊に関する総目録の作成を、今度もシュタイナーに委託した。シュタイナーは静かな興奮を覚えながら、この作業を進めていったに違いない。回想記のなかに次のように綴っている。「ニーチェが読んだ書物を眼前にしたこの作業は、すばらしい務めであった。それらの蔵書から醸し出されるさまざまな印象のうちから、ニーチェの精神がほうふつと蘇ってきた。(中略)ニーチェ自身の手になる熱のこもった批判的書き込みのある蔵書。そしてまた、ニーチェの思想の萌芽が認められる数々の欄外メモ。(中略)私はニーチェの読書体験の吟味から得た印象に痛く心を捉えられ、深い感動を覚えた。」<sup>38)</sup>シュタイナーは、それら千冊余りの蔵書を19のグループに分類してアルファベット順に整理し、227ページにわたる総目録を完成させた。この作業もまた、ニーチェ研究史のうえで、シュタイナーの意義ある功績であることは間違いない。

エリーザベトは、数週間に及んだこの労苦に対する返礼として、シュタイナーに病床のニーチェとの対面を許した。シュタイナーが「生身の」、今はしかし正常な意識を持ち合わせていないニーチェと対面したのは、後にも先にもこの時一回かぎりである。面会後にシュタイナーが書き留めた文章は、最晩年のニーチェを叙した稀有な記録文書であり、きわめて印象的であるので、やや長文ながら、次にその一部を引用したい。そこには、ニーチェに対するシュタイナーの畏敬の念と慈しみの情が、如実であるように感じられる。

「1896年1月22日。たった今私は、ニーチェと面会した。彼は長いすに寝ていたが、いかにも疲れた様子で、まるで長年かかえ込んだ問題を横臥したまま考え続けている思索者のようであった。(中略)外貌は健康な人とちっとも変わらない。顔面が蒼白というわけでもなく、白髪も見うけられない。ツァラトウストラを想わせる大きな口ひげをたくわえている。哲学者の容貌と芸術家の容貌を同時に示す広い額。顔じゅうに、はつらつとした赤味を帯びており、賢者の安らぎの雰囲気漂っていた。その広い額の奥には、今もなお強靱な思想の世界がまどろんでいるかのようだ。私は思った。ニーチェの意識は完全な形で働いており、自分のまわりで起こる一切の出来事を見聞きしているのではないかと。ただそれを自分で言い表せないだけなのだと。私の胸中には、目の前に病臥す

これらいくつかの事例に見られるように、この時期におけるシュタイナーは、エリーザベトに対して、へつらいにも似た恭順さを示し、エリーザベトの良き理解者・協力者の役を果たしている。エリーザベトはあるときシュタイナーのことを「根がお人好し」と評したが、いまだ自らの歩くべき道を模索していた若いシュタイナーが、ニーチェ資料館を独裁的に切り回していたエリーザベトの意に沿って行動していた感があるのは、否めない事実である。

ちょうどこの時期にあたるが、エリーザベトはニーチェの著作権相続者である母親フランツィスカといとこのA.エーラーから、何とかしてその利権譲渡を獲得したいと躍起になっていた。嫌がる母親に対して、言葉巧みな奸策やさまざまな脅しをかけて、ついにその年（1895年）の暮れに、譲渡契約の署名にこぎつけた。一時金3万マルクとニーチェ介護用の年金1600マルクと引き換えに、エリーザベトはニーチェの著作と遺稿に関する一切の権利を自らの掌中に収めた。（その結果、のちのちエリーザベトは、ニーチェの精神的遺産によって莫大な収入を得ることになる。）H.F.ペータースは、その間の事情について次のように記述している。「母親フランツィスカが著作権譲渡の書類に署名するのを拒むうちに、とうとうエリーザベトは自暴自棄になり母親に向かって、あなたは息子の後見人になる資格などないと言い、裁判所に訴えるつもりだと脅迫した。娘のつく悪態と息子の介護に疲労困憊したフランツィスカは、病床に伏してしまった。そして1895年12月18日、重い気持ちで弁護士作成の書類に署名をして、息子の全著作権を娘に譲渡した。」<sup>36)</sup>

フランツィスカは、この契約に署名したすぐ後に、A.エーラー（こちらはフランツィスカより数か月前に譲渡契約に署名していた）に次のように書き送っている。「ふだん扱ったこともないような高額のお金と引き換えに、私がたった今済ませた息子の精神的遺産の譲渡に関する署名は、ただただ娘であるフェルスター博士夫人の懇請と圧力によるものであり、したがって一種の脅迫によるものにほかなりません。」<sup>37)</sup>

わが愛する息子を踏台にしながら、ますます活動の輪を拡大していく娘エリーザベトに対し、フランツィスカは、やりきれない思いと将来に対する大きな不安を抱いていた。

#### 4 資料館紛糾（Archivkonflikt）の渦中へ

シュタイナーは、ゲーテ・シラー資料館に所属しながら、たびたびナウムブルクのニーチェ資料館に身を寄せた。特に1896年という年は、エリーザベ

そのニーチェ評伝を、「フェルスター夫人の記述は、あらゆるディテールを苦  
 労してきちょうめんに描き尽くしながら、その人物の特色をこれっぽちも再  
 現していない（中略）へボな絵かきを想わせます」（シュタイナー宛、1895年  
 8月13日付書簡）、と酷評したのに対し、シュタイナーはマイレーダーに宛て  
 て（1895年8月20日付書簡）、言わばむきになって次のようにエリーザベト弁  
 護の役を買って出ている。「彼女ほどニーチェの実生活を知っている者は他に  
 おりません。彼女以上にニーチェと生活を共にした者もおりません。彼女だ  
 けが私たちにそれらの情報を提供できるわけですから、私たちは彼女ができ  
 るままを、彼女の欲するままに受け入れなければならないのです。」<sup>32)</sup>

マイレーダーのエリーザベト批判に限らず、すでにエリーザベトに対して  
 は、いろいろな方面から不信と疑惑の目が向けられていた。D.M.ホフマンに  
 よれば、「ニーチェの友人であったF.オーヴァーベック、P.ガスト、E.ローデ  
 などが、エリーザベトに対して重大な疑念を抱いていた。」<sup>33)</sup>それらを具体的に  
 列挙すれば、1) P.ガストは、エリーザベトの帰国当初から危惧の念を持った。  
 オーヴァーベックに宛てて次のように書いている。「私だけではなく、ニーチ  
 ェに係わる一切の事柄が不穏な状況に陥らざるを得ない事態となりました。  
 ——フェルスター博士夫人がパラグアイから帰国したのです！」<sup>34)</sup>（1893年  
 9月29日付書簡）。2) E.ローデは、エリーザベトから懇請を受けて、自分  
 宛のニーチェのオリジナル書簡を貸与したが、エリーザベトは返却要求に応  
 ぜず、最後通牒を突きつけてようやく、1年余りのちに（1895年4月）それを  
 返却した。3) F.オーヴァーベックは、エリーザベトから懇請を受けたにもか  
 かわらず、自分宛のニーチェの書簡をニーチェ資料館へ引き渡すことを峻拒  
 して<sup>35)</sup>、バーゼル大学図書館に遺贈し、C.A.ベルヌーリにその出版がたを委託  
 した。（ところが、1905年に出版されたそのベルヌーリ著『フランツ・オーヴ  
 ァーベックとフリードリヒ・ニーチェ——ある友情』（全2巻）に対して、ニ  
 ーチェ資料館側は書簡の著作権をめぐる訴訟を起こし、双方の調停に至る  
 1913年11月まで、長期にわたって法廷闘争が続けられた。）4) F.ケーゲルは、  
 エリーザベトが母親フランツィスカ、あるいはルー・ザロメに関係する書簡  
 や下書きに改竄の手を加える恐れがあると確信して、こっそり写し書きを試  
 みている。いわゆる“Koegel-Exzerpte”（ケーゲル抄録）である。

そのような身辺の人々からの批判をかわす目的もあったと考えられるが、  
 エリーザベトはこの年（1895年）の10月、シュタイナーに懇願して、自分と  
 ニーチェ資料館の功績を賛える頌歌（Lobeshymne）を作らせた。（しかし、  
 それから5年後の1900年に、シュタイナーは後悔しつつ、この頌歌の撤回を  
 声明するに至る。）

映しで「時代に抗する」わが姿を思い描いていたかもしれない。

\* \* \*

さて、以下において、この時期におけるシュタイナーがエリーザベトに対していかに協力的であり恭順であるかを、具体的に列挙してみたい。その後やがて生じる両者のあいだの拮抗とあまりにも対照的であるからである。

シュタイナーは同書の序言において、エリーザベトに対して次のように最大級の謝意を表した。

「私はこの短い序文を終えるまえに、本書執筆中にいろいろとご好意を賜ったニーチェの妹君フェルスター・ニーチェ夫人に対し、哀心よりお礼を申しあげなければならない。この拙論を書く気になったのは、ひとえにナウムブルクの〈ニーチェ資料館〉で過ごさせていただいた月日のおかげである。」<sup>28)</sup>

さらにまた、シュタイナーはエリーザベトに贈った献呈本には、直筆で次のような恭しい文面で、心からの敬意を表している。

「ニーチェ評伝の賞賛すべき著者であり、ニーチェ財宝の保管者であるエリーザベト・フェルスター・ニーチェ博士夫人に深甚なる敬意を捧ぐ。著者。」<sup>29)</sup>

同書の序文には、もうひとつ注目を引く文章が認められる。すなわち、その前年の1894年に出版されて話題を集めていたルー・アンドレアス・ザロメ(1861—1937)のニーチェ論『フリードリヒ・ニーチェ——人と作品』に対する露な「敵意」が表明されていることである。シュタイナーは、

「私の描く超人像は、今もっとも広く読まれているルー・アンドレアス・ザロメ夫人著のニーチェ論が描き出した、あの歪曲されたニーチェ像とは、まったく正反対のものとなった。」<sup>30)</sup>

と述べたうえで、「ザロメの著書にはどのページにもキリスト教の臭いがし」、どのページも「真のニーチェの空気を吸い込むには無気力すぎる」と、論難の標的にしている。

周知のようにこのルー・アンドレアス・ザロメは、一時期ニーチェおよびパウル・レーと友愛の「三位一体」の関係を結んだ。これが直接的な原因となって、ザロメはエリーザベトの激しい憎悪の対象となった。シュタイナーは、そのエリーザベトの仇敵ザロメに対して、敵意をむき出しにしている。

そう言えば、エリーザベトはシュタイナーがニーチェ論を公にした同年の1895年に、『フリードリヒ・ニーチェの生涯、第一巻』<sup>31)</sup>を公刊したが、シュタイナーの良き理解者である著述家のローザ・マイレーダー(1858—1938)が

造を知覚する。その場合に人間はもはや、真理というものを平伏すべき対象とはみなさない。真理を、自己の精神的所産とみなすのである。』<sup>24)</sup>

シュタイナーは、ニーチェの理念とは別個に、M. シュティルナーが提起した〈自由人〉という概念を援用しながら、個人の絶対的自律性を説こうとしているが、そこには、自由な精神の自己実現のうちにこそ生の意義を認めようとするシュタイナー自身の見解が表明されている。シュタイナーは精神的な体験や自己の魂に由来する世界観の創出という次元に重点を置いて、もっぱら自らの所説を思うままに展開している傾向すら見られる。この著書の公刊から約30年後に書かれた回想記『わが生涯の歩み』(1923-25)に、シュタイナーは次のように書き記している。

「ニーチェは、自分が考えたり感じたりした一切の事柄を魂の奥底から、純粹に精神的な形で引き出す天分を擁していた。ニーチェには、魂が共に体験する精神的事象の内側から世界観を創り出していく傾向が、顕著であった。』<sup>25)</sup>

このように、ニーチェと共鳴し合う自らの類縁性を強調する一方で、ニーチェの言説に対する論駁も認められる。たとえば、ニーチェが〈本能〉という次元に比重を置くあまり、個々人にとっての〈意識〉の意義を軽視していることに疑問を投げかける。無意識的な本能に支配されたディオニュソスの人間は、なるほど〈旧来の価値体系や彼岸の意志の下僕〉でないことは確かであるが、しかし、〈自分自身の本能の下僕〉になりさがっている、とシュタイナーは反論する。シュタイナーによれば、〈道徳的な想像力〉によって自らの目標を創り出す状況にある者だけが自由なのだ。シュタイナーは言う。「人間というものは、自分の行動の思想的な動機づけを意識の内部において創り出すことができる場合にのみ、自由の身であるのだ。』<sup>26)</sup>

シュタイナーのニーチェに関する唯一のこの著書には、〈時代に抗する闘争者〉という副題が付されているが、これについては興味深い一点がある。ニーチェは『反時代的考察』(1873-76)第2篇「生に対する歴史の利害について」の第6節に次のように書いている。

「諸君が伝記の類を読みたいときには、〈何某氏とその時代〉という決まり文句のついたものではなく、その本の扉に〈時代に抗する闘争者〉とあるものを選ぶがよい。』<sup>27)</sup>

おそらく、シュタイナーはこのニーチェの勧告に従って、自著の副題を選んだのではないかと推測される。総じてシュタイナーは、ニーチェ哲学そのものに深く沈潜したというよりも、むしろ時代に抗した「反時代的な」考察者のニーチェに強く引き付けられていた。シュタイナーは、ニーチェと二重

集出版のための公的地位に就いたことはない。(中略) ニーチェ資料館と私の関係は、私がワイマール生活で大きな刺激を受けたひとつのエピソードであったとすることができる。」<sup>20)</sup>

と明言している。確かに、シュタイナーがたびたびニーチェ資料館に出入りをし、ある時期はエリーザベトとの厚い信頼関係にあったことは明らかな事実であるが、資料館員としての正式雇用によるものでなかったことだけは、ひとまずここで確認しておく必要があるだろう。

### 3 シュタイナーのニーチェ哲学・ニーチェ資料館との係わり合い

シュタイナーは、1894年3月にエリーザベトと面識を得たのち、急速にニーチェ資料館の訪問が度重なるにつれて、ニーチェ哲学に対する関心が深まっていったと考えられる。著書『フリードリヒ・ニーチェ——時代に抗する闘争者』(1895年5月刊)は、そのような気分の高まりのなかで書かれた。シュタイナーはこのニーチェ論を約2か月半で脱稿したといわれるが、本書の注目すべきところは、それまでのようにニーチェを「心理学的な問題」としてではなく、「どこまでも哲学者として」(durchaus als Philosoph) 論じようとしている点である。

この著の序言においてシュタイナーは、まず第一に自分とニーチェとの〈内面的な類縁性〉(die innere Verwandtschaft mit Nietzsche) を強調している。

「私が6年前にフリードリヒ・ニーチェの著作を知ったとき、すでに私の胸のうちには、ニーチェのそれと相似た理念が形成されていた。私はニーチェとは無関係に別様の手順で、ニーチェが『ツァラトウストラ』、『善悪の彼岸』、『道徳の系譜学』、『偶像の黄昏』で言明したことと同じ響きの見解に達していた。」<sup>21)</sup>

シュタイナーは、ニーチェの思想のうちに、自分の思想と同類のメンタリティーを感じ取り、ニーチェ固有の〈自由な精神〉や、個我の自己実現という主題、そして何よりも、〈時代に抗する闘争者ニーチェ〉の精神のありように共鳴したと考えられる。シュタイナーは、「この精神のありようは、私自身の精神的体験によくなじんだ」<sup>22)</sup>と述べ、たとえば、自らの文章にニーチェの言説をにじませつつ、精神の解放について次のように論述する。

「強者は、自分の創造的自我の実現を図りながら、生の課題を手探りする。(中略) 弱い輩は、最高の徳として無私無欲を説き勧めるが、それは単に彼らの創造力が欠如している結果にすぎない。」<sup>23)</sup>

「人間は、自分自身が真理の創造者なのだ。〈自由な精神〉は、真理の創



のような折も折、編纂作業にあたるケーゲルの協同編集員として、シュタイナーの同僚のH.v.d.ヘレン博士が任命された（1894年10月）。シュタイナーは、自分こそ「当初からニーチェ全集編集員として予定されていた」<sup>16)</sup>がゆえに、このエリーザベトの措置<sup>17)</sup>に大いに憤慨した。もともとシュタイナーは、ゲーテ・シラー資料館の待遇に不満を持っていたばかりではなく、この頃すでに「二重あごのでぶ枢密顧問官ゲーテ」（シュタイナーの言葉）以上に、ニーチェに対して強い関心を寄せており、編集員採用を心待ちにしていたからである。<sup>18)</sup>

ところが、そのヘレンは就任後まもなくケーゲルと激しいいさかいを起こし、翌1895年初めにはニーチェ資料館を辞任した。エリーザベトはこのことをすぐシュタイナーに報告するとともに、編集員就任の要請をしたが、なぜかシュタイナーは、すぐにはそれに応じていない。シュタイナーが就任を躊躇した理由については、必ずしも明らかではないが、本稿第4節で詳述するように、シュタイナーがこの頃すでに、エリーザベトの身のまわりに漂う、ある種の「いかがわしさ」に一抹の不安を感じ取っていたのではないかと推測される。Ch.リンデンベルクはその点について、「シュタイナーはしばらく、ニーチェ全集出版の協同作業に携わることを考えていたのだが、エリーザベト・フェルスター・ニーチェを取り巻く種々の状況と彼女の行状とが、その考えを萎縮させた」<sup>19)</sup>と述べている。実のところ、エリーザベトはすでにこの頃から、一部の心ある人々から批判の目にさらされており、シュタイナーは、エリーザベトの身近かにいればなおさらのこと、それらの事情や情報にも接し易い立場にあった。

ケーゲルは、ヘレンとのあいだに激しい争いごとを起こしたため、エリーザベトの配慮もあって、長期間（約半年）イタリアの地に赴いた。このためエリーザベトは、緊急を要する資料館の作業であるニーチェ文献総目録の作成をシュタイナーに委託した。1895年6月に完成したこの文献目録は、当時公刊されていたニーチェに関する168篇の著書・論文・雑誌記事を、ニーチェの著作に則して体系的に分類したもので、これはそもそもニーチェ文献目録の嚆矢である。

ケーゲルは1895年4月に帰館したが、シュタイナーはその後も引き続きニーチェ資料館の仕事に関与した。しかしながら、雇用契約を交していたわけではなく、あくまでも非公式な作業従事であった。

シュタイナーのこのようなニーチェ資料館勤務の形態については、その後いろいろと論議的となったが、シュタイナー自身は、

「私は一度たりともニーチェ資料館の公的地位、あるいは、ニーチェ全

さやかながらも「ニーチェ<sup>アルヒーフ</sup>資料館」を開設するに至る。それは、パラグアイから帰国後、わずか半年足らずの1894年2月のことであった。

エリーザベトは、それに先立つ同年1月、P.ガスト（1854－1918）が2年前から出版していた（すでに5巻を発刊していた）ニーチェ全集の刊行停止を命じ<sup>12)</sup>、資料館開設後まもなく（同年4月）、新しいニーチェ全集編纂のための編者としてF.ケーゲル（1860－1904）を雇い入れた。しかし、なにぶんにも編纂作業や資料館運営については手探りの状態にあったので、エリーザベトは1894年5月11日に、設置後すでに十年近い実績をもつワイマールの「ゲーテ・シラー資料館」<sup>13)</sup>を訪問して、ニーチェ資料館を軌道に乗せるためのノウハウを学び取ろうとした。もしかするとこの時エリーザベトの胸中には、その資料館の編集員（シュタイナーのほかに、H.v.d.ヘレン、J.ヴァーレ、F.F.ハイトミュラー、A.フレゼニウスらがいた）のうちから優れた人材を引き抜こうとする魂胆も秘められていたかもしれない。

エリーザベトとルドルフ・シュタイナーの最初の出会いは、この日のことであり、それから4年余りのちの1898年夏における絶交の日に至るまで、以下に述べるように、両者は「ニーチェ」を介し、きわめて密接な間柄にあった。

初対面の時のエリーザベトの印象を、シュタイナーは、「当時私は、彼女の愛想のよい、活発な才気にきわめて大きな共感（meine tiefste Sympathie）を覚えた」<sup>14)</sup>と書き綴っている。初対面からほぼ2週間後の5月下旬には、エリーザベトから招待を受けて、シュタイナーをはじめとするその同僚の数名が、ナウムブルクのニーチェ資料館を答礼訪問している。この時エリーザベトは、シュタイナーらの訪問者に自分が保管しているニーチェの草稿を見せて、眼に涙を浮かべつつ、感極まった声で「いとしい兄さん」について能弁に語ったという。さらにその年の夏に、シュタイナーは2回目の訪問をしているが、この時はいまだ未公開のニーチェの遺稿『反キリスト者』の朗読会が催され、シュタイナーはこの作品にことのほか強い衝撃を受けたようだ。シュタイナーは、深い精神的な交わりを結んでいたシュペヒト夫人に宛てて、次のように書いている。

「これは、ここ数世紀に書かれた本のなかでも、もっとも重要なもののひとつです！ 私はその個々の文章に、自分自身の知覚を再発見した思いです。この著作によって喚起された私の満足度を、さしあたりどう表現したらよいか、適当な言葉も見つかりません。」<sup>15)</sup>

ニーチェ資料館との関係が深まるにつれて、シュタイナーが次第にニーチェの思想そのものに強く引き入れられていった事実は、覆うべくもない。そ

までのシュタイナーにとっては、むしろゲーテこそ最大の関心事であった。1890年10月以来シュタイナーは、ワイマール版『ゲーテ全集』編纂員に任用され、ゲーテの自然科学論文の編集・校正・注解・解説の仕事に打ち込んでいた。（ちなみに、1886年に『ゲーテ的世界観の認識論要綱』、1897年に『ゲーテの世界観』を出版している。）

シュタイナーがニーチェに興味をそそられた観点は、総じて、「ニーチェの生に対する姿勢」から生み出されてくる独自の文体と思念であり、また、「時代の精神生活がもたらした万般の事象に耳をそばだてた」ニーチェの魂そのものであったようだ。時代を覆う実証主義や客観主義に背を向けて、個人の原理（das principium individuationis）や精神の自由を謳うニーチェに、シュタイナーは強く心を動かされたであろう。「実のところ、シュタイナーがニーチェの中に見てとったものの多くは、シュタイナー自身の反映であった。シュタイナーも自分の時代について、〈これらのすべては私と何の関係があるのか。もっと別の世界、私が住むことのできる世界があるに違いない〉と感じていたのである。」（C.ウィルソン）<sup>10）</sup>そう言えば、シュタイナーという思想家は生涯を通じて、内観的な思考体験の試行を繰り返した限りない自己探究者であった。

さて、周知のごとくエリーザベト・フェルスター・ニーチェは、反ユダヤ主義の首謀者のひとりである夫ベルンハルト・フェルスターとともに1886年、植民地「新ゲルマーニア」の建設のため南米パラグアイに移住した。しかし、数年のうちにその夢は破綻して、夫は1889年6月に自ら命を絶つに至る。エリーザベトはしばらくのあいだ残された事業の継続に力をそそいだが、しよせん状況はいかんともしがたく、いわば失意のうちに1893年9月、ようやく故国の人となった。ところが、この時エリーザベトの胸の内では、生涯にわたる新たな人生目標が設定されつつあったことは、疑いを入れない。1894年に『パイロイト通信』に掲載されたエリーザベト自身の言葉が、それを証明している。「生涯にわたる（私の）もう一つの大きな課題。すなわち、かけがえのない哲学者であるたった一人の兄を世話しながら、兄の著作物を管理し、また、兄の生涯と思想を著述するという私の使命が、今後は私の全生涯と全精力を要求する。——このような次第で、今や私は植民地の件については、見切りをつけざるをえない。」<sup>11）</sup>

エリーザベトはこうして、ほとんど自分一人の判断と持前の精力的な行動力とで、散逸しているニーチェの遺稿・書簡など関係文書の収集に努め、さらに、それらを陳列・保管するため、母親フランツィスカの家の一室に、さ

その当時発表された三つのニーチェ論——H.テュルクの「ニーチェとその哲学的迷路」、H.カーツの「フリードリヒ・ニーチェの世界観」、F.N.フィンの「価値の新秩序のための基盤」——を取り上げながら、ニーチェ信奉に傾きすぎたり、誤った解釈をしているそれらの論文を、客観的な視点から批判している。

注目すべきことは、当時にあってはニーチェの思想に心酔した熱狂的な論調が支配的であった状況のなかで、シュタイナーがニーチェに対してつねに一定の距離を保って、冷静な対応をしている事実であろう。シュタイナーの言葉を引用する。

「フリードリヒ・ニーチェは、万般の事象を疑問視する。ただ単に、あれやこれやが真理であるか否かを問うのではない。そもそも真理というものが、めざすに値する目標なのかどうかを問うているのだ。」<sup>6)</sup>

「ニーチェは〈超人〉の具体的な造型には成功しなかった。作品『ツァラトゥストラ』においてニーチェは、時たま詩的に秀抜な形象やアフォリズムで、超人の空想を弄んだにすぎない。」<sup>7)</sup>

シュタイナーは、ニーチェを、伝統的文化概念の徹底した破壊者、当代における第一級のラジカルな精神と評価しつつも、ニーチェ哲学の病理性や超人像の空疎性について言及し、批判的な言辞も忘れてはいない。

ところで、ここに興味深い逸話を書き留めておかなければならない。このニーチェ小論を公にした1892年にシュタイナーは、あるアンケートで「もしあなたがあなたでないとしたら、誰でありたいか」と問われたのに対し、「狂気に陥る以前のフリードリヒ・ニーチェ」(Friedrich Nietzsche vor dem Wahnsinn)と答えたという<sup>8)</sup>。シュタイナーにとってニーチェという存在が関心をそそられる対象であったことの一証左であろう。

シュタイナーはそのあと引き続き二篇の短いニーチェ論評を書いているが、この時期に至るまでの特徴は、ニーチェの思想を哲学そのものの次元から捉えるというより、むしろニーチェの文体に固有な修辞法やその戦略に大きな比重が置かれていることである。

「ニーチェの思想の魅力は、それがまとって現われる並はずれた装いにある。(中略) 私にはニーチェの思想の中味はたいていの場合、ことさら目新しいものとは映らなかった。(中略) 私にとってニーチェという存在は、哲学的な問題というより、つねに心理学的な問題であった。」<sup>9)</sup>

シュタイナーはその後1893年に、十数年前より構想を練っていた主著『自由の哲学』を著わしたが、「この著書で論述された私の理念内容には、ニーチェの影響はない」と、シュタイナー自身が言明するとおり、この時点に至る

チェ論争の一翼を担った事実には変わりはない。なにしろシュタイナーによるニーチェ言及は、500箇所を越えているのである<sup>2)</sup>。

そのような理由から、エリーザベトとルドルフ・シュタイナーのあいだの一連の展開を明らかにする作業は、ニーチェ資料館をめぐるさまざまな経緯ならびに初期の段階におけるニーチェ受容史の究明という点からも、甚だ意味のあることだと考えられる。M.D.ホフマンも指摘するとおり<sup>3)</sup>、ニーチェ研究におけるルドルフ・シュタイナーの意義が、こんにち、ほとんど看過されていることを考慮に入れるならば、なおさらのことである。

本稿では、ニーチェ資料館と係わり合った多くの人物たちのうちから主にシュタイナーを取りあげ、1890年代を中心としたニーチェ資料館運営をめぐる暗部に照明を当てることによって、エリーザベト・フェルスター・ニーチェの実像の一端を明らかにするとともに、シュタイナーにとってのニーチェ顛末の経緯を追ってみたい。

## 2 シュタイナーのニーチェ哲学・ニーチェ資料館との出会い

「私が初めてニーチェ著作に触れたのは、1889年のことである。それまで私は、ニーチェの作品はただの一行も読んだことがなかった。」<sup>4)</sup>——自ら記しているように、シュタイナーのニーチェ著作との最初の出会いは、1889年のことである。シュタイナーは『善悪の彼岸——未来の哲学の序曲』（1886）を読んで、その文体と思想の大胆さに心に奪われると同時に、一方では、その抉るような暴露的思弁や大仰なツァラトゥストラの形姿には、少なからず異和感を覚えたようだ。1889年と言えば、ニーチェがこの年の1月3日、トリノの街頭で突然卒倒し、そのまま精神の闇に陥った年にあたる。当時はニーチェがようやく識者のあいだで話題になり始め、ニーチェに関する著書・論文も出版されるようになってきた時期に相当する。K.H.ハーンの指摘によれば、「ニーチェが精神的破綻を来した1889年の頃には、ニーチェの名はせいぜい慧眼の識者にわずかに知られているだけで、一般には当時ほとんど未知の名前であった。しかし、その後数年のうちに、状況は一変する。」<sup>5)</sup>つまり、シュタイナーが初めてニーチェを読んだのは、ニーチェの予言者的な重みのある言葉と謎に包まれた精神の病が、ようやくニーチェ哲学への関心を喚起し始めた時期にあたる。もしかするとシュタイナーのニーチェ講読のきっかけも、そうした世上の動きに応じたものであったかもしれない。

シュタイナーが「ニーチェ主義」と題するニーチェ小論をある文芸誌に掲載したのは、それから3年後の1892年3月のことである。シュタイナーは、

## ニーチェ資料館とエリーザベト・フェルスター・ニーチェ(Ⅱ) ーエリーザベトとルドルフ・シュタイナーー

恒 吉 良 隆

### 1 ま え が き

人智学 (Anthroposophie) の提唱者として知られるルドルフ・シュタイナー (1861-1925) は、ニーチェの思想と深い係わり合いを持ったばかりではなく、ニーチェ資料館にも関与して、エリーザベト・フェルスター・ニーチェ (1846-1935) とのあいだに複雑な人間模様を描いた。

シュタイナーは、もっとも早い時期のニーチェ論のひとつ、『フリードリヒ・ニーチェ——時代に抗する闘争者』(1895) を著したほか、エリーザベトの依頼を受けて、ニーチェ研究史上初のニーチェ蔵書目録ならびにニーチェ文献総目録を作成した。また、エリーザベトのためにニーチェ哲学についての個人教授をしたり、ニーチェ資料館とエリーザベトを賛えるための頌歌 (Lobeshymne) を書いたりもした。ところがシュタイナーは、それから数年後にはそのエリーザベトと激しく対峙して、文字どおり「エリーザベト・フェルスター・ニーチェの独裁的で欺瞞的な策謀に対する最初の公的な弾劾者」(der erste öffentliche Ankläger gegen die selbstherrlichen und fälschenden Machenschaften von Elisabeth Förster-Nietzsche)<sup>1)</sup> となった。エリーザベトの犯したニーチェ原典の改竄や隠蔽などの策謀については、その後ほぼ一世紀にわたって断続的に、F.オーヴァーベック、E.ローデ、P.ガスト、C.A.ベルヌーリ、E.F.ポータッハ、K.シュレヒタ、M.モンティナーリなどによって論及され、鋭く指弾されてきたが、シュタイナーはある意味でそのような糾弾者の先駆けともみなされるであろう。確かにシュタイナーのニーチェ論そのものには、今日の観点から眺めるとき、ニーチェ評価の論理や手法に種々の疑問点も認められるが、いずれにせよ、シュタイナーがかなり長い年月にわたってニーチェの思想に密着し、ニーチェ評論や著書を著し、また、激越なニー